

# 病院のススメ

yamamomon

朝、目が覚めると、頭が鉛のように重く、痛みが脈を打っていた。

...起き上がれない。僕は、また目をつぶってしまった。

ああ、ちくしょう、案の定だ。昨日、隣の山崎が、ずっと気味の悪い咳をしていたからなあ。

...仕方がない。今日は会社は休みだ。

頭の中で呟いてから、僕はまた、とろとろと眠り込んでしまったようだった。

カーテンから、五月の金色の朝の光が淡くあふれだして、時計が所在なく鳴っている。

カチカチ、カチカチ。

時計の針が、静かに回る。

実家から持ち出した、年代モノの柱時計だ。

子供の頃から、聞き馴染んだ音。昔も今も、ただ永遠に、同じ時間の流れを刻む。

...今頃、本当は、満員電車でぎゅうぎゅうづめになっているはずの時間だな。

半分夢の中、僕は頭の片隅で、そう思っていた。

電車の中にいるぼくと、部屋の時計の風景が、まぶたの裏にダブって見える。

カチカチ、カチカチ。

熱や痛みの感覚の向こう側で、ぼくがたくさんの分裂してゆくような、夢の中の分裂感覚。

電車に乗ってるぼく。部屋でうめきながら眠っているぼく。

昨日残業しながらラーメンをすすっていたぼく。

課長から、ミスを怒られてるぼく。周りの同僚の目を気にしてるぼく。

先週電話で彼女とけんかしたぼく。

時計の音の向こう側に、たくさんの時間が重なり、ゆがんだかたちの、異次元世界が存在しているような気がした。

そうして、もっともっと奥の方に、もっともっと昔のぼくがいる。

懐かしい町の路地で、少年の姿のまま、とびはねながら笑っている。

...ああ、どうかしている。

起き上がらなくっちゃ。

とにかく会社に電話して、それから医者だ。仕事が忙しくて、あんまり休むわけにもいかないんだから。

小さな町医者、午前中の待合室は、大体、ジジババだらけと決まっている。

...しかも、皆、ご町内の顔見知り、常連さんらしい。

だって、全員の好奇の眼が、間違いなく、新参者の僕に集中している。

ぼくはひどく決まりが悪かった。きっと、ひどい顔をしているに違いない。

だって、ごんごんと痛む頭を布団からむりやりおこし、その辺のシャツをひっかぶっただけで出てきたのだ。

小さな受付窓口の横には、毛糸あみの服を着たキューピー人形。

薬の匂い、スリッパのぺたぺたいう音、冷たくひかるリノリウムの床。

町医者ってのは、大抵どこもこんな風なんだよな。

くもりガラスには、外の木漏れ日がちらちらと映り、小鳥がさえずっている。

...そういえば、小学生のときも、風邪をひくと、母さんが、こんな、同じ風景の病院に連れてきてくれた。

そうして、決まって、変な薬をもらった。オレンジ色のシロップ。

おそろしく不味い、あの甘苦い水薬の味が口の中によみがえる。

思い出の薬の味を飲み込んだと思ったら、

...あれえ、またアタマの中が、どんどん変な具合になってきた。

何だか、世界じゅうが一層ぐるぐるまわりだし、時間が、あの時に、くると戻ってしまうような感じだ。

病院のあとのお昼ごはんはおかゆ、そうしてまずい薬を飲んだあと、不機嫌なぼくに、母さんは必ずプリンかモモの缶詰をだしてくれる。

微熱の中で、うつらうつらと眠る午後。

時計の音、布団のぬくもり、時折心配そうに覗く、母さんの気配。

そうして、「向こう側」で、もうひとりの僕が、ヨーヨーかなんかで遊びながら、何か叫んでいる。

「そうだよ、もちろん、そっちが本当のぼくなんだ。」

「大体、ひとつの夢が、長すぎる！そんなサラリーマンの夢の中なんかで、一体何につかまっちゃったのさ！もうボク、そんなのあきちゃったよう。」

（...あのときから今まで、長い人生の、夢をみていただけ？）

また、時計の音が聞こえる...

（病院の柱時計なのか、僕の部屋の柱時計か、よく区別がつかない...）

僕は、ぽかんとした頭を押さえ、目をつぶった。

きっと、熱で頭のネジがゆるんじゃってるんだ。

...しかしそれにしても、あの甘苦い、おそろしく不味かった水薬だけは、やっぱり、もう、ごめんこうむりたいなあ。

看護婦さんが、さばさばとした声で僕の名を呼ぶ。

ふらふらと僕は立ち上がる。診察室のドアはギイギイと鳴る。

どうもすべてが、感覚の外、遠い風景の出来事のように感じられる。

医者、ふさふさと白いひげをはやしたジイさんだった。

みるからに山羊に似ていた。

そして、僕が小さな丸椅子に腰掛けたとたん、めえめえいうような声で、こう決め付けたのだ。

「メエ。風邪ですな。しかしあんた、風邪だけじゃない。もっと重大なところイカレとる。めえ。」

...何だかどうも、絶対に変な医者だ。

僕は逃げ出したくなった。おまけに彼は、あの不味い水薬を飲ませた医者、どうしても、どこか似て見える。

（ぼくは、あの先生が、ひどく苦手だったんだ。）

ジイさん先生は、僕の胸に聴診器をあて、のどをのぞきこむ。

「...うむうむ。めえ。やっぱりじゃな、思ったとおり、窓が開いとる。」

（「窓だって?!」）

「とりあえず、これを飲みなさい。メエ。」

...差し出したのは、オレンジ色の水薬アンプルである。

ウゲ。

「帰り道あたりで、効きだすじゃろ。」

それから、しきりにカルテに外国語を書き付けていたが、やがて向きなおってこう言った。

「メエ、風邪薬、それから、神経と胃袋のための特製煎じ薬。帰ったら、すぐ飲むように。めえ。」

おや、僕の胃が、いつもしくしくと痛むのがわかったんだ。意外に名医なのかもしれない。

急にありがたい気持ちになって、少し丁寧な礼を述べて立ち上がった。

しかし、ふと見たその白い頭に、山羊ツノが生え出したように見えたので、ぼくはあわてて目を伏せた。

待合室へのドアをあけたら、一斉に、大老人集団の好奇に輝く目にさらされた。

全部の目がこっちにむかってじろりと動くのは、どうにも、不意打ちである。

油断していたぼくの心臓は一瞬、縮みあがった。（...こういうのって、たまないよなあ。）

僕の歩くとおりに動くたくさんの目玉を全身に受け、薬を受け取り、料金を支払う。

...故もなく後ろめたいような気持ちで、そそくさと背中をまるめ、逃げるようにして、外へ出なければならなかった

もうどうやってたどり着いたか、よくわからない。  
水道の水で薬を飲んでから、倒れこむようにふとんにもぐりこんだ。  
そうして、午後いっぱい、うとうとと眠り続けた。

\*

夢ばかりみていたのだ。  
僕は赤ん坊で、ゆりかごから、透き通った五月の青空と、高い木の梢を眺めていた。  
娘のようなももいろの頬をした、若い母さんが、静かな子守歌を歌い続けているのが聞こえていた。

「ぼうや、ぼうや、私のぼうや。  
お眠り、風の中。お眠り、ゆれるカーテン。  
お日さまは、窓の外、ぼうやは、すやすや、夢の中。  
おめめがさめたら、あまいミルク。  
母さんは、ここでずうっと待ってるの。  
おまえがどこを夢みても、いつでもここで、待ってるの...」

母さんが揺らすのか、風のせいなのか、揺りかごが、時折わずかに揺れる...

ふっと目を開くと、夕暮れの気配。窓は、淡い甘い琥珀色の光。

深い長い眠りのあと。手足が、じいんとしびれるように甘く、やすらかに重い。

ずうっと、長い甘い夢を見ていた。

そうして、まだ、夢の続きにいらるような気がした。

（おまえはいつでも、永遠のゆりかごの中、空を飛ぶ夢を見ているだけ。...どこかで誰かが、優しい声が告げていた。）

熱はさがったようだ。気分はすっかりよくなっていた。胃の辺りも、ふわりと軽い。

あの医者のお薬が効いたのだろうか。懐かしいような、ひなたの味がした。

（当然じゃ、めえ、当然じゃ。ワシのお薬はよくきくクスリ、メエ。壊れた神経つないだダケよ、めえ。）

（嬉しそうに得意そうに笑う、ヤギジイさんの顔が浮かんできた。）

身体いっぱい、緑と金の光がふんわりと満ちて、快く風が流れているような、暖かい気分だった。

古い記憶の、日向ぼっこのエッセンスをのみこんだみたいだ。

窓からの琥珀を浴び、ぼくはゆっくりと起きなおる。胸の奥から湧いて出る、金色のエッセンスが、身体中をめぐり、つつみこむ。

古い夢からよみがえり、ぼくの中に新しくうまれなおした、ほのかに輝く優しい場所。

胸の奥の大切な日向ぼっこスペース。

そこから新しい夢をみる力がみちてゆく。

\*

母さんに会いたい。父さんと、妹にも。

故郷の友達は、みんなどうしているんだろうか。

妹が電話をくれたとき、ぼくはどうしてあんなにつっけんどんにしたんだろう。

母さんからの手紙に返事も書けなかったんだろう...

忙しかった、疲れていた、それだけのことで。

つるつる、つるつる。

...ああ、何だか、忘れていたことばかり思い出す。

甘いソーダ水のように、淡いももいろに染まってゆく夕暮れを見つめながら、僕は、僕であるための大切なことを、ゆっくりと思い出し始めていた。

## 病院のススメ

<http://p.booklog.jp/book/44212>

著者 : yamamomon

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/yamamomon/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/44212>

ブックログのパブー本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/44212>

電子書籍プラットフォーム : ブックログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社 : 株式会社paperboy&co.